

トモエ肥連 拡販推進部会 現地研修会開催 in 千葉

2月3日、千葉県に於いてトモエ肥連全関東東海・千葉・埼玉地区拡販推進部会の現地視察及び研修会が盛大に開催された。参加者は北から福島、栃木、群馬、茨城、埼玉、千葉、神奈川、新潟、静岡、愛知、岐阜、富山、石川県から会員36名、事務局、メーカー、当社を合わせて50名の参加となり、大型バス1台を借り切ってエムシー・ファートイコム㈱いわき工場のトモエ肥料を使用した生産現場と昨年度の試験結果、商品説明の研修会と2部構成で半日間みっちり「トモエ漬け」となった。

まずは昨年より本格販売が開始されたノンコーティング肥料「ダイヤロング」を使用している飯岡町の越冬トマト栽培を見学した。生産者の〇様は、トマトを秋に定植し年をまたいで7月まで取り続ける長期取りを採用されていた。長期取りでは初期から旺盛に樹を作ってしまうと最後まで樹がもたずスロースタートが出来る肥料が要望されている。当地では基肥に有機配合肥料や有機化成肥料が多く用いられているがこのような肥料では年明けになると肥効が保てず追肥が必要となってくる。また、保温や除草目的でマルチをするのだが、マルチを張るとなかなか粒状の肥料を畝間に施肥することが出来ず、液肥に頼らざるを得なくなっており、肥料コストが嵩んでしまう現状がある。よって、基肥肥料でチッソの肥効が長効きする、しかも環境に負荷をかけにくいノンコーティング肥料が今後のニーズに応えられる商品として上市されたのが「ダイヤロング」シリーズだ。生産者の感触として昨年も長効きするノンコーティング肥料を使用していたのだが、ダイヤロングはその肥料よりも肥効がスローに現れて樹は暴れた感じはないとのこと。ハウスの中に入ってみると分かったが暴れた感じはなく軸が太くてとても良い管理がなされていた。今の生育状況は良好との評価でこれからどれだけ肥効が持つか楽しみになっている。

次に銚子市に移動し360度キャベツ畑が広がっている本城地区のE様の2月取りキャベツ圃場を見学した。関東では激寒期にキャベツが栽培できる地域として海岸に面した比較的温暖な銚子・三浦・館山があるが、銚子はその一大産地となっている。E様は親の代よりトモエ化成を使用し、絶対の自信を持っている。現地圃場で収穫間際のキャベツを取ってもらったが揃いが良く、しっかりしたキャベツが出来上がっていた。参加者の日ごろの行いが良かったのか、当日は銚子の高台では珍しい風もない温暖な日であった。



研修会場に移動して技術普及グループより試験結果報告、新商品の開発並びに試験状況の説明がなされた。新しい肥料として緩効性窒素入り流し込み液肥の開発状況と試験結果、高チッソ型一発肥料が普及するなかで登熟が思わしくない田んぼ向けに検討された、土壌改良とリン・カリを補う目的で本格上市が検討されているPK入り腐植化促進材（ときわ化研）、リン酸苦土肥料にカリを添加したPK入り微量要素肥料（MFCE）の説明がなされた。開発の経緯と理論、ターゲットが明確化されていて現場のニーズに応えられそうな興味深い新商品となっていた。トモエ肥料の特徴が新商品に生かされて時代のニーズに合わせて進化してく様を感じ取れ、ますます楽しみだ。今後の活動と普及に弾みがつく研修会となった。今回設営に尽力された事務局、メーカー関係者並びにトモエ肥連全関東東海地区拡販部会長の（有）齊忠商店齊藤社長様、生産者の方々に書面を通じて御礼致します。

全肥商連愛知県部会主催「農業視察研修」

in 愛知／田原

去る1月23～24日、愛知県田原市にて全肥商連愛知県部会主催の農業視察研修が開催された。愛知県部会長 師定(株)高松社長を始め、部会員・賛助会員・事務局が参加し、一泊二日の研修を行った。

愛知県田原市は愛知県南東部 渥美半島に位置し、北は三河湾、南は沖合いに黒潮が流れる温暖な特性を持つ地域。この恵まれた特性を活かしながら、大規模な生産基盤整備と温室・畜産団地などの造成により、全国でも有数の農業先進地域。基幹農業は、露地野菜、施設園芸、畜産など多様。露地栽培では主にキャベツ、ブロッコリー、レタス、スイカ、露地メロンなど、施設園芸では、トマト、メロン、キク、カーネーション、バラ、洋花、鉢物など。中でもキクの栽培は、施設園芸による栽培が大半を占め、1年を通じて計画的に生産・出荷されており、日本一の生産量を誇る。

一日目は、イシグロ農芸(有)の田原試験農場を訪問。同地域で盛んな施設園芸の課題として、①重油等化石燃料の使用による温室効果ガス、②白熱電球による大量の電力消費がある。そこで同社は、田原市および地域農協・団体・大学等と共に「田原市低炭素施設園芸づくり協議会」を発足。農林水産省の「2009年度低炭素むらづくりモデル支援事業」のモデル地区に選定され、2010年4月より低炭素モデルハウスにて、電照菊(デンショウキク)の栽培試験を開始。尚、電照菊とはキクの栽培方法。(同地区で主流)日照時間が短くなると花芽成長が促進されるキクの性質を活かし、人工的に日照時間を調節する事で成長管理が可能。具体的な試験内容としては、高断熱機能と10年以上の耐久性をもつ耐候性ハウスに太陽光パネル、LED照明、ヒートポンプ等の省電力機器を導入、及び低温管理が可能な品種選定によるコスト削減の検証。日照、温度、植物体温等のセンサーを設置した複合環境制御による一元管理技術を研究。高付加価値・安定生産の栽培技術の更なる研究に加え、経済性の改善が課題となっているとの事。



伊シグロ農芸(有)低炭素モデルハウス
(作物は電照菊)

二日目は、メロンとトマトを施設栽培する渡邊農園を訪問。当農園の特徴のまず1つ目は、土耕の「隔離ベッド栽培」。「隔離ベッド栽培」の利点は、①水管理が容易、②床土が限定する事によりボイラーの熱風による土壌消毒が可能。(薬剤を使わない為、人体への薬剤リスクが無い)。2つ目は、「同じ床土を基本10年以上使用」。メロン、トマトは、時に連作する場合があるが、収穫跡の熱風殺菌のみで連作障害は発生しないとの事。3つ目は、メロン種子を交雑選抜により自家採取している。特にメロンはうどん粉病の被害が多い為、今回はメロンのうどん粉病抵抗性品種の栽培試験を見せて頂いた。メロンの味は肥料だけではなく、日照時間が関係する。この冬場は日照時間が少ない為、現在栽培していたメロンは、種子採取用として栽培。味を左右する基肥には非常に拘りあり、ぼかしを主体に緩効性チッソ肥料、カキ殻石灰等を配合したオーダーメイドのペレット肥料を使用。液肥にて適宜追肥を行っている。



渡邊農園の土耕隔離ベッド栽培

園芸作物の有数の産地である田原市の代表的な優良な農家、先進的な農業技術を直に視察でき、非常に充実した研修となった。(名古屋支店清野)

そろそろ、花粉の季節になってきました。去年の夏に天候不順となった西日本は例年並みか例年よりやや少なくなりそうですが、東北や関東では例年の約1.5倍と多くなる様です。対策はお早目に！

編集事務局：南部、助川